

和剣

VOL. 10

2007年 1月 29日

和歌山県スポーツチャンバラ協会
〒640-8033 和歌山市本町4丁目32番地
TEL 073-433-7720
FAX 073-433-7730

1. 第2回合同稽古（「形」）の結果。

1月18日（木）に大友館・本部道場で実施した第2回合同稽古には福森、大江、澤田、川口、石上、由良、山下、原田、柚岡（太）、安田、そして桃山（本部）道場門人13名、近鉄カルチャー門人2名、有朋館門人1名が参加しました。少年部の稽古は崎山君と中原君をリーダーとしての稽古、一般部は柚岡（太）と安田の指導で「形」稽古を重点的に行いました。時間の過ぎるのは早く、小太刀の「形」の3本目までの稽古で終わりました。何時も思うのですが、「観る」のと「やる」のとでは大違いです。難しいからこそ修練するのですから、今回の稽古でやり残した小太刀の形、更には長剣の形を練習する機会を改めて創りたいものです。

2・富田流（とだりゅう）の小太刀。

富田勢源（富田五郎左衛門）

富田流の始祖・富田九郎右衛門の長子。

父について中条流の刀槍の術を学び、特に小太刀に優れていた。眼を病んでから、家督（富田流）を弟の治部左衛門に譲り、剃髪して入道し、勢源と称した。

「永禄3年（1560年）夏に美濃の国で、常陸の国・鹿島住人の梅津某という刀術の達人との試合に打ち勝ち、大いに名を上げた。」と言われるその試合の顛末。

『梅津はその宵より湯がかりして信心をなす。富田勢源はそれを聞いて、「心が直なれば祈らずとも其の利有り」とて、黒木の薪物の中から如何にも短き1尺2、3寸の割り木を見出し、元を皮にて巻く。梅津は木刀の長さ3尺4、5寸なるを八角に削り、錦に入れて持つ。梅津が検使役に「願わくば白刃にて仕度く」と云うも、勢源は「彼仁は白刃にてせらるるとも、己は木刀にてよし」と答うるにより、梅津も大木刀に定む。梅津は空色の小袖木綿袴にて木刀を右脇に構える。その気色は竜が雲をひき、虎が風に向かうが如し。眼は電光に似たり。勢源は柳色の小袖半袴着で立ち挙がりて、板縁より歩行す。彼、割り木木刀を掲げ、優然として立つ風情、牡丹花下の睡猫とも云うべし。其の時、勢源、梅津に言葉をかけて進みて勝負をなす。梅津、如何したりけるか、小鬢より二の腕迄うたれ、頭を打ちきられ、身体ごとくあけになる。梅津、木刀を取り直し、振り挙げ、打ち出る。勢源はさわがずして梅津の右腕を打つ。梅津、勢源の前へ倒れて、その持ちたる大木刀が勢源の足下にあたるを、勢源は一脚に踏み折りて、飛ぶ。梅津、起き上がりて懐中の脇差を抜きて、勢源を突かんとするを、勢源、木刀を振り挙げて打ち倒す。』

「日本武道辞典」のページを捲っていると、スポーツチャンバラ（小太刀護身道）の源流の一つだと教えられている『富田流小太刀』について説明する項目に出会いました。その内容には深遠な含蓄があるように思いますので、紹介します。もとより、既にご存知の方もいらっしゃるでしょう。「1尺」対「3尺」での対決にあたって、打たれないための“工夫”とか“極意”は何処にあるのか。これは、生涯を通じての“永遠の課題”です。なお、大評判を呼んだ映画「たそがれ清兵衛」にも似たような「果し合いシーン」があったことを思い出しました。（会長 安田孝雄）